



「防災よもやま話」シリーズ 愛知から始まった日本の防災

愛知防災リーダーの皆さん、あけましておめでとうございます。

昨年は、度重なる豪雨、台風の来襲、そして地震と、まさしく「災」の年でした。特に、年末に発生したスマトラ地震の被害の甚大さは、想像を絶するモノでした。前回の「防災よもやま話」で、東南海地震の津波の教訓を解説した後だけに、本当にびっくり致しました。

正月を応急仮設住宅で過ごした、中越地方の方々や、豪雨・台風災害に被災したの方々、そして、インド洋周辺で被災された多くの方々に、お見舞いを申し上げたいと思います。

私たちは、これらの災害を我がコトと受け止め、これからの災害を少しでも軽減するよう、できるだけ多くの教訓を学んでいきたいと思います。そして、「災い転じて福となす」よう、日頃の啓発活動と備えの活動を通して、地域の防災力をアップさせていきたいと思います。その中心的な役割を担って下さるのが、あいち防災リーダーの皆様です。

さて、今回の話題は、「愛知から始まった日本の防災」です。

名古屋圏は、我が国随一の産業拠点であり、約1000万人が住む我が国第3の都市圏です。気候に恵まれ、豊かな土地柄です。しかし、一方で、数多くの自然災害に見舞われてきました。明治以降だけでも、死者1000人を超す3つの地震災害（1891年濃尾地震、1944年東南海地震、1945年三河地震）と、1959年伊勢湾台風や2000年東海豪雨などの風水害に襲われています。

濃尾地震は、内陸で起きた過去最大の地震です。根尾村（現本巣市）美鳥に高さ6mの断層崖を作り、美濃から尾張にかけて甚大な被害を与えました。まさしく、「身の（美濃）終わり（尾張）地震」でした。この地震では、明治以降に導入された煉瓦造などの西洋建築が大きな被害を受け、西洋文明の安易な導入に警鐘を鳴らした地震でもありました。当時の政府は、この地震を契機に文部省に震災予防調査会を設置しました。震災予防調査会は、地震学や耐震工学の礎となった組織であり、数多くの貴重な研究成果を残しました。この組織は、関東地震の後、東京大学地震研究所へと発展的に解消をしました。万一、濃尾地震が発生したときに名古屋大学が存在していたら、地震研究所は名古屋大学に作られていたかも知れません。

太平洋戦争中に発生した東南海地震は、真珠湾攻撃（12月8日）の4周年記念行事の準備の最中の（12月7日）お昼時に発生しました。当時は、戦時統制下のため、被害資料は十分に残っておらず、一般住民には災害情報が十分に行き渡りませんでした。翌週12月13日から、本格的な名古屋大空襲が始まり、翌年1月の空襲は9回を数えたそうです。さらに、1ヶ月後の1月13日には三河地震が発生しています。1944年末期から1945年初頭にかけての地震と空襲の続発によって、名古屋周辺の軍需施設は壊滅的な痛手を被りました。この東南海地震と三河地震における建物被害の教訓は、1950年に作られた建築耐震基準にも活かされています。すなわち、耐震工学の基礎になった災害と言えます。

さらに、戦後に発生した1959年伊勢湾台風での被害は、死者5,098、全壊家屋833,965にもものぼり、戦後最大の自然災害となりました。これを契機に、災害対策基本法が制定されています。まさしく、我が国の防災対策の原点となった災害と言えます。ちなみに、名古屋大学の土木工学科も、伊勢湾台風後に設置されました。

このように、我が地は、度重なる災害に見舞われ、それを教訓に地震学・地震工学・耐震工学が芽生え、さらに、我が国の防災体制が確立しました。私たちの地域の災害を教訓にして、他地域の災害が軽減されたわけです。今度は、逆の立場になって、私たちが、他地域の災害を教訓として我が地の災害を軽減しなければいけません。昨年発生した様々な災害を教訓にして、私たちの地域で、災害が起こる前の「備え」のモデルを作ろうではありませんか。そして、「地震」という自然現象が発生しても、「地震災害」という社会現象を発生させない方法を作り、広く他地域に広げていこうではありませんか。あいち防災リーダーの会の知恵として、少しずつ作っていきましょう。